

瀧おどりの作詞者をご存じですか

8月の龍頭が滝といえば、滝まつりと滝おどり。そこで今月号では民謡「滝おどり」を取り上げます(以下、文中敬称は省略)。

作詞は宮田隆、作曲長岡敏夫、編曲竹内尚一、振付花柳芳美彌。長岡、竹内は島根大学の音楽の先生。振付の花柳は松江市にいた舞踊家だったようです。曲の制作は昭和26年頃だと思われませんが、そのように想像する理由はまた別の機会にして、作詞家の横顔を紹介しましょう。

宮田隆は大正2(1913)年12月16日島根県生まれ、昭和57(1982)年7月8日没。島根県庁に入り、公務のかたわら、作詞、作詩、放送劇やコント、随筆、シナリオ等を執筆。

作詞者としての代表作はなんといっても、昭和39(1964)年開催の東京オリンピックで歌われた「東京五輪音頭」でしょう。NHKが全国から歌詞を募集したもので、見事当選。古賀政男作曲、三波春夫等の歌唱により全国で愛唱されました。島根県民の歌「青い空なら」(昭和26年)やPRソングである「一畑パーク」。雲南市関係では、「大東町民の歌」「木次町の歌」「吉田音頭」「大東町・海潮中学校校歌」「大東町・久野小学校校歌」などもあります。

歌詞は七番まであり滝の風情と池月伝説がうたわれます。四番では「当って砕けて別れちや見たがもとは一筋深い仲」なんて、男と女の情愛が織り込まれていきます。「雄滝」と「雌滝」があることから、恋愛を連想したのかも。

七番を「逢うたはじめが裏見滝」で結びます。「雄滝」「雌滝」は自然物なので仲良く永遠にいっしょ。でも、人の世では最後は「恨み」に満ちたお別れもある。人の世の不条理、不思議を伝えたかったのかもしれないね。

瀧おどり

作詞 宮田隆
作曲 長岡敏夫
編曲 竹内尚一
振付 花柳芳美彌

一、アー掛宮松立 龍頭ヶ滝は
山もどろろに 山もどろろにヨ
滝の瀬音が鳴りわたる
ヨイホイ〜 ヨーイヤサ

二、アー輝はしける 音波はもてる
瀧の瀬のしずかにや虹が立つ
瀧の瀬のしずかにや虹が立つ
心すがたもさみまらに
ヨイホイ〜 ヨーイヤサ

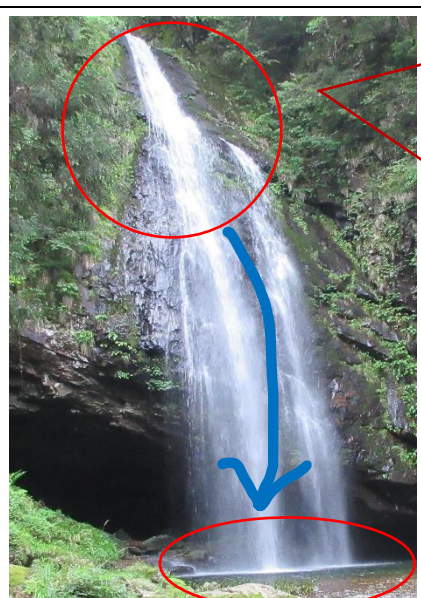
三、アー音頭上手で 瀧りがはずみや
揺り手振りになら 浮いて吹く
ひらり木の葉が舞い上がる
ヨイホイ〜 ヨーイヤサ

四、アー当って砕けて 別れちや見たが
未練のこして 筋深い仲してヨ
淵でまた逢う ヨイホイ〜 ヨーイヤサ

五、アー名馬池月 ひづめの跡は
今も池原に ありありと
しる昔の語り草
ヨイホイ〜 ヨーイヤサ

六、アー滝の権現 しぶきがかる
雄滝雌滝の 雄滝雌滝のヨ
中をこりもつ恋の 雄滝雌滝のヨ
ヨイホイ〜 ヨーイヤサ

七、アー恨みますぞ 私を捨てて
花の都へ行った人
逢うたはじめが裏見滝
ヨイホイ〜 ヨーイヤサ



四、
「当って砕けて別れちや見たがもとは一筋深い仲」
「淵でまた逢う 滝の水」